

【小刷り】

朝日新聞本紙東京本社 2月21日 12版▲ オピ1 【箱】 私の視点 ヨコ長
内部ID：N201302210079570 kmz:tm2160(0869420)

私の視点

まちづくり会社社長

阿部 裕志



地域おこし

都会と田舎のセンス磨こう

「巡の環」はそんな地域コーディネーターを養成する場を提供する。2泊3日の初級編で地域をどう見るかを学ぶ。4月スタートの通関制の中級編では海士町で合宿して理論と実践を学び、自分が住む地域で実践してもらおう。半年間は弊社が全力でサポートする。

田舎が都会より遅れていることはない。いなかセンスは日本人の精神文化の宝庫だ。和を尊ぶ、人情あふれる交際の精神。グローバル化の世界でそんな「日本人らしさ」を見直すことが、地域の、ひいては日本の元気につながるに違いない。日本海の島から、それを伝えていきたい。

土地の人間が二つのセンスを身につけた地域コーディネーターに成長するのが望ましい。田舎出身者はいなかセンスを磨き、とかいセンスを習う。僕らのように都会から移住した人は、いなかセンスを学ぶのである。

全国ではいま、地域おこしに外から関わるコンサルタントが活躍する。多くは最先端の取り組みに精通しアイデアも持つとかいセンスの持ち主だ。ただその地に住まないため、最終的に自分事にならず、地域の壁に苦しむ例も少なくない。いなかセンスの不足だ。これだと成果は一過性に終わる。

二つのセンスの根底にある価値観はかなり異なる。とかいセンスでは、速く、論理的な「課題解決力」が評価される。いなかセンスでは、輪を乱さず、あいさつやお礼など、人として当たり前のことを当たり前でできる「あり方」が評価される。

田舎には都会人の心のよりどころどころになる「よさ」がある。しかし「よさ」もそのままに都会には伝わらない。いなかセンスの「一押し」を、とかいセンスのビジネス感覚で広めてこそ、地域の元気は持続する。

その土地の価値を土地の目線で敬意をもって理解できる受信力たる「いなかセンス」と、その価値を観光や物販などにのせて発信できる「とかいセンス」とを、バランスよく備えた田舎と都会の橋渡し役、「地域コーディネーター」の存在だと、私は考える。

海士町はもともとまちづくりに熱心で、全国から注目されていた。だが今後も元気であり続ける保証はない。持続可能な地域社会をつくるのに、何が必要なのか？

トヨタ自動車を退社して島根県沖にある隠岐諸島の一つの島、海士町に移住、まちづくり会社の「株式会社巡の環」を仲間と起業して5年になる。人口約2300人、40%が65歳以上という過疎地だが、「元気」なまちだ。

紙面サイズ： 1.80段(36.00倍)×72.00行(176.60倍)